

## カフカの『城』における到着の場面について

日 野 安 昭

外 国 語 教 室

(1972年9月11日受理)

## On the Scene of the Arrival in Franz Kafka's ,Das Schloss'

Yasuaki HINO

Department of Foreign Languages

(Received Sept. 11, 1972)

The novel "Das Schloss" begins with the scene of the arrival of a traveler, whose name is K. The writer of this paper regards it as one of the most important scenes in the work. He directs his attention to K. in the scene and tries to make his situation clear.

フランツ・カフカ晩年の長編『城』は、彼の他の多くの作品と同様、冒頭から多くの問題を含んでいる。なるほど K. の城との戦いや城の機構や K. と村人たちの関係といったものも読む者の関心をひかずにはおかないが、それらに入っていくための導入部である第一章のいわゆる到着の場面は、すでに後の内容を暗示以上の言葉で語っている。従ってこの到着の場面を検討することによって作品の意図するところをかなり深部まで理解することが可能となるであろう。そのような考えにたつて、この小論においては、この到着の場面に含まれているいくつかの問題点を抽出・分析し、それらに検討を加えることによってこの作品の輪郭をできうるかぎり浮きぼりにしようと試みた。

『城』は、夜も遅く一人の男が到着する場面をもって始まる。

Es war spät abends, als K. ankam. Das Dorf lag in tiefem Schnee. Vom Schlossberg war nichts zu sehen, Nebel und Finsternis umgaben ihn, auch nicht der schwächste Lichtschein deutete das grosse Schloss an. Lange stand K. auf der Holzbrücke, die von der Landstrasse zum Dorf führte, und blickte in die scheinbare Leere empor. (S. 5)

K. は今や国道と城や村とを結ぶ橋の上に立ってい

る。しかもこの橋は、同時にその両者を切り離す橋でもある。国道は、おそらくは K. がこの橋に至るまでの間に営んでいた生活、つまり何らかの理由で振り捨て、辛い旅へと出ずにはいられなかった生活と結びついたものであろう。彼は、ここでも「まるで立ちどまるともつと判断の力をもてるかのように」(S. 16) この木橋の上で長いこと立ちどまって闇を仰ぐ。この木橋はまだ城の領域に属するものではなくて、中間に立つものである。ここで K. は、自らの進むべき道を選ぶ可能性と選択権とが委ねられているのを知る。K. は引き返そうと思えば今来た道に戻ることもできるし、それと連なるであろう故郷や妻子のところへ帰ることもできる。あるいはそのまま進んで村の中へ入っていくこともできる。そのいずれをとるかはひとり K. にまかされているのである。とはいえこの選択権は、完全に K. に委ねられているとはいえない点がある。というのは、たとえば後にこう言っているからである。「私はどの村へ迷いこんでしまったのかね。いったいここに城があるのかね。」(S. 6) K. は自分が踏み入った村に城があるということを全然知らない。この発言をまつまでもなく、冒頭に示されているように、城の存在を示すどんなに弱い光もないからには K. 自身の目に城の姿が映じるはずもない。従ってこの冒頭の文章には、Politzer の指摘するように<sup>1)</sup>、二つのパースペクティブが存在すると考える方が妥当であろう。すでに存在を自明のこととされてい

る城山についての観察は、物語者の目になるものであり、闇の中を見上げているのは K. 自身である。この城山の存在の自明さは、すでにそれだけで K. の進むべき道を示すのに十分なものである。作者カフカはその関心を K. はもちろんのことながら、すでに城山ないし城に向けていて、片足をこれから先に起こるであろうこと、すなわち「それから彼は宿を捜しに出かけた」(S. 9) ことに踏み入れているとともに、残りの片足を木橋の上の K. のところにとどめておくという二重の姿勢をとっている。このカフカの姿勢は、K. から戻るか進むかという選択権を奪いとるものであると同時に、第一段落と第二段落との間に横たわる空間を埋合わすものであるといえよう。この意味で、K. の選択権もきわめて曖昧なものになっている。

しかしながらこの木橋に立つ K. の姿は、この選択権の問題とならんでもう一つ別の重要な事柄を意味している。それはこの Roman 全体を貫く K. の戦いの意味を暗示するものであり、この冒頭を単なる冒頭以上のものにしていく。明確に表現されていなくとも、ここから K. のおかれている状況や K. の何もかもを求めている姿勢をかなり明瞭な輪郭でもって思い描くことができる。木橋の上の K. は、辛く長い旅の後にやっと村を目の前にして安堵し、疲れた体を休めようと立ちどまったのだと想像することは容易であるが、あまりに容易すぎてそこに占める時間の「長さ」が理解不可能になってしまう。橋の上にとどまっていた時間的長さに単なる安堵や休息以上のものをみずにはいられない。この長さが単に K. の意識の上だけのことであったにせよ、あるいは実際にそうであったにせよ、「長さ」のもつ意味の重さに違いはないであろう。それを考えるにあたって、まず K. の見上げている先に注意しなければならない。

K. がのぞきこむのは、底の知れない漆黒の闇である。しかも彼の目は下方ではなく、上方に向けられている。その夜空には星のまたたきもなければ、ましてや月のでているわけもない暗黒が支配し、村を雪が包んでいるように K. を暗闇が包んでいる。ここに K. の不安定な位置が浮かび上がってくる。K. にとって確実なものは、自分と自分がその上に立っている木橋の存在だけであるが、その足場さえ至極頼りないものである。K. の頭上には深い闇が横たわり、彼の脚下にあるものも、たとえ底があるにしても、また闇である。K. は木橋の上に立ってじっと闇の中を凝視することによってそこを突き抜け、その背後に横たわる何ものかに迫ろうとする。カフカはこの K. の姿の中に自分の選ぶべき道を再考する K. と、ものの背後に迫り、そこにある何ものかを見きわめようとする K. の二つの姿を二重写しにして

読者の前に提出してみせる。またカフカは、K. を一面黒で包むことで彼のおかれたただならぬ状況を告知しようとする。黒は底の知れない深さ、人の心を圧迫する重苦しさ、事の重大さと困難さ、すべてのものをあくなくのみこむ吸引力といったイメージを喚起する。その点からも、この到着の場面は K. のかかえた問題の大きさと深さと重さとをみごとに語っている。闇ばかりでなく、霧もまた K. の視界をおおう。闇の中にかかる一本の木橋の上に立つ一人の人間のイメージは、後の苦しい、果てしない K. の戦いをそのまま示すものといえる。

闇にかかる木橋の上に立っているということ、換言するならばしっかりと大地に足をつけていないということは、どんなに K. の位置が不安定であるかということを示している。カフカは K. を木橋の上に立たせることによって、「その根を大地から引き抜かれてしまっている人間」<sup>2)</sup> を表現しようとしたのであろう。K. がのぞきこむのは、底のない空虚 (die Leere) の世界である。がその実、この空虚は「外見上の」(scheinbar) ことでしかない<sup>3)</sup>。そこにはその空虚をみたす何ものかがある。もしこう言ってよければ、K. は空虚をみたす何ものかを見た。ないしは見ようとしている。空虚を埋める行為、すなわち闇をはかる行為こそ、後の展開にみられるように K. の根本的な行為となっている。K. はなるほど到着した。しかしそこは村でも城でもなく、一本の木橋であった。

そこから第一段落と第二段落との間に存在する Pause に漂よう並々ならぬ緊張を感じとることができる。第二段落の冒頭 (Dann ging er, ein Nachtlager suchen.) の dann の一語に含まれる緊張感は無類の重みを持ち、前段に暗示されている K. のおかれた状況と、それを認識した上でそれに立ち向かおうとする K. の決意のほどがこの一語に凝集されている。K. は結局、村へ入っていくことを選んだのである。

この木橋に至るまでの K. の背景をみてみよう。彼には妻子もあれば故郷もある。そのどちらをも捨てて大きな犠牲を払い、全くの無一文状態になって長く辛い旅に出て、ここに到着した。しかもそこから再び故郷に戻ったところで然るべき別の仕事を見出せるあてもない。(S. 110) 30 余才にもなって故郷も妻子もうち捨て、みずばらしい「浮浪者」(S. 9) 同然の恰好をして到着したところがこの木橋とは、いったい何が彼をこの旅へと駆立てたのだろうか。またいかなる「任務」を負っているのだろうか。この間は、この Roman が木橋に到着したとする場面から始まり、城村に居を構えようとする後の K. の戦いのことを考えると、さして意味ある間

とは考えられない、とも言えるし、事実従来そのように考えて、K.の戦いの意味や本質をもっぱら後の具体的な戦いの中からみ探ろうとしたり、城と村とK.のそれぞれとの関係の究明に力を注いできているようにみられるが、むしろこの間に何らかの答えを与えぬかぎり、K.の戦いの意味は不明確なままであると思われる。なぜならK.の位置づけはすでにこの発端のところから余すところなくなされていると思われるからである。

K.が一本の節くれだった杖<sup>4)</sup>とわずかばかりの荷物しかもたずに旅に出るまでの間、故郷においてどのような職をもち、どのような生活を送っていたのか、我々には村の人々と同じように全く知らされていない。故郷での生活が裕福なものであったか、あるいは不自由な程度のものであったか、あるいは貧困のどん底にあったものか、推測する手がかりすら見出すことができない。それは逆にいえば、カフカがそれらに関心の外においたように、我々もそれらを問題にする必要はないといえよう。問題にすべきことは、K.の経済状態を推測することではなく、「わたしは自分の意志でここにやって来た」(S.289)とするK.の主張にみられるように、K.は意識的にかつての生活を捨ててきたということであり、後には城村でのフリーダとの結婚生活にも満足できず、自らの「目的」(S.64)を追いつづけるという姿勢である。一方ではこの地に居を構えるのだと言いながら、その実自ら自分のまわりに存在する現実の世界を抹殺していく。こうした態度は決して自棄的なものではなく、戦いに対するK.独自の基本的な態度である。

そこで我々は、到着の夜シュヴァルツァーが測量師到着の件を城に問合させたとき、K.の様子を報告する言葉の中に興味ある一語を見出すことができるので、それについて少し考えてみようと思う。その報告の中でシュヴァルツァーは、K.を30余才とみなしている。(S.8) K.の年齢が30余才とされていることは、『訴訟』(Der Prozess)におけるヨーゼフ・K.もまた30才の誕生日の朝に不条理な逮捕を迎えなければならなかったことを想起させる。『訴訟』においては、ヨーゼフ・K.の30才という符号にカフカは単なる符号以上の意味を託していると考えざるをえない。そのように考えるとき、カフカにあっては30才という年齢は人生における大きな転換点を意味する符号としてとらえられ、用いられているように思われる。しかもそれは、カフカの場合、社会の中に深く根を下ろしたくましく生き抜いていくうえでの契機となるのではなく、逆に自己と社会ないし世界との間に生じる緊張関係あるいは亀裂を自覚させ、自己を凝視させずにはおかない時点として、つまり世界と自己とが対峙する時点としてとらえられている。仕事の世

界に埋没し、それこそ我を忘れていたヨーゼフ・K.に対しては、逮捕という自己告発の形式がとられているが、『城』においては、K.は最初の瞬間から社会的にも精神的にも絆をもたないものとしてあらわれている。ヨーゼフ・K.は戦いの中へいや応なく引きこまれるが、K.は逆にその中へ旅立っていく。

30余才のK.には中性的で匿名のK.という記号がつけられているだけで、職業上の肩書きもなにひとつつけられていないし、持ち物も最少限で、村に滞在するための許可証さえ持っていない。社会的には明らかに「だれ一人として保証人として立てることのできない」(S.71)根なし草としてあらわれている。この到着の場面において問題なのはK.ひとりであり、K.にとってはK.個人なのである。これまでの生活とともに、ほかの彼をとり巻く社会的な関係も含めた一切のものが濃い闇の中に放りこまれている。ここでもまた、我々は闇の中に一人立つK.の姿をみることができるだけである。

「カフカは精神の活動や探究を長い旅によって描写する」<sup>5)</sup>ように、「長い旅」の後に木橋の上に立ったK.の姿から彼の旅立ちが精神的な動機にもとづくものであったことをみることは容易であろう。たとえばK.が木橋の上に立って橋の下にある深みを測るよりはむしろ夜空をのぞきこんだことは、K.の立つ位置がこの根底に、すなわち人間としての存在の初源にあることを意味するものであって、カフカはこのことを前提としているためにK.をして自らの足下の深みを見下ろすことをさせず、むしろそれを不要なこととして捨て去ったのかもしれない。この到着の場面において代表されるK.をとりまく基調は、あくまで闇で代表されるものであり、ここにカフカのいう「どんなに弱い基盤、あるいはまったく存在しない基盤の上に生きているか」<sup>6)</sup>という認識と同じ状況にあるK.をみることができる。30余年の生涯の後にとどろつたのがこの不安定な位置であり、新たな苦悩にみちた戦いへの旅立ちである。

K.をこの木橋にまで駆りたてたものは何か。それを知る上で巻末に収められた冒頭の別稿は重要な手がかりを提供してくれる。この別稿は、なるほどその筋立ての上では様相を一変させてはいるが、それは単に表層のことだけであって、その底にあるものに寸分の違いも認められないといっても過言ではないだろう。次に少しくこの別稿をみてみようと思う。

ここでも一人の「私」なる旅人がとある村のある宿に馬車で着いたところから始まって、同じく到着の場面である。彼はK.ほどには疲れ切っていないし、身なりもひどくはないようである。来て驚いたことには、村人たちはみな彼の到着をあらかじめ知っている様子で、

不審に思い尋ねてみると、女中のエリーザベトは「数週間も前から」(S. 463) 知っていたと答える。このことは彼を不愉快にする。なぜなら「戦うためにわたしはここに来たのだ。だがわたしはまだ到着もしないうちから攻撃されたくはない。」彼がこの地に来た目的は「戦い」のためであったが、その戦いはこの地で決着をつけるべき種類のものでもなければ、決着のつく種類のものでもない。そのことは、翌日には(場合によっては到着したばかりとはいえ今すぐにでも) この村を立ち去る用意のあることからもうかがうことができる。戦うために来たように、この男の態度はたいそう攻撃的でさえある。それは、ひとつにはこの戦いが幾多の障害を予期させるものだからでもあろうが、またひとつにはこの戦いに彼がいかに意を注いでいるかをもの語るものでもあろう。彼はいう。「わたしは重い任務(Aufgabe)をひかえていて、それにわたしの全生涯を捧げてきた。わたしはよるこんでそうするし、だれの同情も要求しない。しかしそれは、すなわち任務はわたしがもっているすべてであるがゆえに、わたしはその任務をなすとげる上で邪魔しかねないものはみな容赦なく踏みつける。」(S. 462) 彼のかかえている任務は重いもので、彼の全生涯を要求する。全力をそれに集中することなくしてはたしえぬ種類のものである。そればかりかこの任務は、今(おそらくはこれから) 彼が手にしているたったひとつのものである。

ここで注目すべき点は、彼が「だれの同情も要求しない」といっていることである。なぜ「同情」であって、「助力」あるいは「援助」でないのか。つまり「だれの助力も要求しない」と言わなかったのか。このことは彼の任務の本質にかかわる重要なことだと思われる。「同情」と言ったのは、おそらくは彼のかかえているという任務が他人の助力を頼むまでのものではないというよりも、むしろ他人の助力の入りこむ余地のないことを意味しているのであろう。彼の任務は彼ひとりに課せられた彼ひとりではかなしとげることでできない種類のものだと考えられる。他人の入りこむ余地など全然ない、従ってせいぜいのところ他人は同情の言葉をかけてやるのがしてやれる精一杯のことなのである。彼にしてみれば、同情を受けることはできても援助の手を受けることはできない。あくまで彼一人でなしとげなければならない種類のものである。しかも任務遂行は、どうやら戦いを余儀なくするものらしい。ひよっとしたら「任務」は「戦い」そのものかもしれない。その任務が全生涯を要求するものであってみれば、事前に到着のことが知らされているということは、必然的に不利な立場から戦っていかなければならないだけに彼にとってはただならぬ

事態である。すでに彼は到着する前から城側に一から十まで知り尽くされていて、あらかじめ手をうたれ、受身で戦わなければならないことを知らざるをえない。

加えて彼の踏み入った村は、外界から遮断されたいわば陸の孤島で、「だれも来ません。まるで世界は私たちのことを忘れてしまったかのようです。」(S. 463) そこには何人も踏みこむことのない世界が、ある特定のものにだけと定められた地がある。それはただ彼だけときめられて、いつかは彼が訪れることを予期された世界である。その意味からしても、彼のひかえた任務は彼という個の中で、彼という個の名においてはたされるべきものである。

さてここにみた別稿との間に、我々はいくつかの共通点を見出すことができる。たとえばともに到着の場面をもって始まっていること、私なる男も K. も前途に苦難が待ちかまえていることを予期していること、たどりついた地がどちらもいわば外界から孤立した地であること、私も K. もたいして荷物をもっていないことなどがある。また主なる相違点としては、別稿が一人称の形式で書かれているのに対して三人称の形式で書かれていることがあげられる。こうした別稿との間の類似点や相違点にもかかわらず、カフカの意図するところに変更はみとめられないといってもよいであろう。そのように考えると、K. もまた全生涯を投げうってでもはたさなければならない「重い任務」をひかえていることや、K. の戦いの困難さも推測することができる。事実、城村の中へ踏みこむとき、彼は並々ならぬ決意を抱いていた。たとえば「K. は名誉と平安につつまれた生活を送るためにやって来たのではなかった」(S. 223) といわれているように、K. を旅へと駆りたてたものは、彼に平穩のうちに人生を終えることを斥けさせ、苦悩にみちた生活をあえて選ばせる。このことは K. の任務の性格を暗示するものである。K. の目的は「一介の測量師として小さな製図機に向って静かに仕事をする事」(S. 99) という発言の字面に代表されような平安にみたまされた穏やかな生活ではなく、そうした生活では満たされることのないものをあくなく求めつづけることであろう。そうでなければ、すでに妻子もあれば、あれほどにまで記憶の中に食いこんでいる故郷を持ちながらそのどちらも捨てて旅に出なければならなかった理由を、貧困以外のものに見出そうとすることは困難である。K. が自ら選びとった生活は、平安や愛や恩寵や光などとは無縁のものである。役人ガーラターは K. のもとに二人の助手をやるとき、彼らに次のような指示を与えて助手派遣の意図を述べている。「一番重要なことはしかし、お前たちがあの男を少しばかり快活にしてやることである。わたしのと

ころに入った報告では、あの男は何事も万事たいそう重大視する。いま村へ入ってきたばかりであるが、すぐさまそのことがあの男には一大事なのだ。実際にはまったくとるに足らないことだというのに。そのことをお前たちはあの男におしえてやらなきゃならん。」(S. 339)「万事たいそう重大視する」という表現で K. の姿勢があらわされているが、ここに至って第二段落の冒頭の dann の一語のもつ重みがどれほどのものであったかを明確に理解することができよう。K. が村に踏み入るまでに要したであろう橋の上での時間の「長さ」、それに要したであろう「決断」の重み、彼の脳裡に去来したであろう数々の事柄、それらを支えきれないほど一杯に含んであの一語は置かれている。ひょっとしたら目の前にある村では、私なる男が出会ったように、K. を待ちうけて、もう城側が戦いの用意を整えている可能性もある以上、K. は戦いの意を新たにして入っていったとも考えられよう。疲れた身体にもかかわらず、長いこと橋の上を立てて全力を自己に集中しようと努力したかもしれない。村に入るといふことは、彼にとって自分が得ようとするものを考えてみれば、決してとるに足らないことではなく、それこそ「一大事」なのである。そうした K. の側の事情を、城側はすでに K. が村に入ったときから知り抜いている。これは城側が K. について必要なことはもれなく知っていて、笑って K. を迎え入れたことを意味するものである。万事を重大視するという K. の性格からして、K. が重大な任務を負っていることをうかがわせる。

ところでこれまで K. の職業については避けてとおってきたが、それは理由のないことではない。すでに指摘したごとく、K. がどのような職業の持ち主であるかはこの冒頭のパラグラフには明示されていないし、ただ単に記号で K. と記してあるだけで、後に K. が主張するように、「測量師」としての K. とはなっていない。この Roman の発端から K. を測量師 K. として規定することは早計であろう。この到着の場面においては、K. は測量師として登場しているのではなく、K. なる一人の旅人として登場していることを忘れてはならない。村に入った K. を追っていくにしたがって、我々は他のだれかから測量師として迎えられたのではなく、彼自身が名乗らずしては測量師 K. なる男は現れなかったことをみることになるからである。このことは注目し値する点だと思われる。従来多くの研究者が、不用意とも思われるほどに K. を測量師 K. として規定していることは問題としなければならぬだろう。Politzer も指摘して、K. が自分は医者にも直すことのできなかつた難病を治療する術を心得ていて、それがために故郷で

は人々に「苦い薬草」(das bittere Kraut) と呼ばれていたと主張していることから故郷でも測量師であったということに疑問視しているように<sup>7)</sup>、あるいはまた、測量師として城から「確認」されながらも、村長の取り計らいによるといわれる学校の小使いの職の提供に依っている(もっともこの点はフリーダの強いすすめによるが) ことなどからしても、K. がはたして故郷で測量師として生活していたのか、また測量師として伯爵によばれてきたものなのか大いに疑問視せざるをえない。K. を測量師として性急に決めてかかることは、この作品の意味を探ろうとする際には慎まなければならない。

そこで次に K. の主張するごとく、測量師として伯爵に招聘されてきたものかどうか疑問となる点をいくつか挙げてみて、それらののちにそうした K. の主張のもつ意味について考えてみたいと思う。

K. はシュヴァルツァーにゆり起こされると、自分は伯爵に招聘されてきた測量師であると名乗り出て、ゆり起こした男を非難するとともに、明日になれば助手たちが道具をもって追いかけてくるとも言っている。(S. 7) しかしながら翌日になってもくるべきはずの助手たちも測量機材もいっこう着く様子がない。それどころか K. の前にはまるで天から降ってわいたかのように二人の助手アルトゥールとイェレミーアスが現れる。この二人を待っていたのではないことは、K. と彼らがラーゼマンの家の前で初めて出会ったときの様子や、改めて宿で昔からの助手だと知らされたときの K. の驚きの言葉の中にも容易にみてとることができる。しかも彼らは、測量の道具も持ってこなければ、測量の心得もない。K. はこうした彼らを自分の昔からの助手として認めるよう決断を迫られ、認める。この二人の助手のやって来た方向は、K. もみたとおり「城の方向から」(S. 23) であった。彼らは、K. の主張にしたがって城側から与えられた助手であり、城側のスパイかもしれない。彼らが城側から送られたことは、助手派遣の意図を示すガーラーの言葉や、「わたしの知っているかぎりでは、あの二人を要求したのはあなた(K.) 御自身です」(S. 186) というフリーダの言葉からも知ることができる。そもそも K. は、滞在許可証も持たなければ、伯爵の名前さえ知らない。このことは K. の主張する助手の存在を疑わせる。城側はおそらく K. の主張する助手たちの到着などないことを知っていて、あえてこの二人を送ってきたのである。この Roman に流れる7日間という時間に、K. の主張するような助手の現れる気配さえ見出すことができない。しかも K. 自身でさえそうした助手たちや測量道具の存在を忘れ去ってしまっているかのようである。

この二人の助手たちのことをみるまでもなく、すでに

到着の夜の宿でのシュヴァルツァーと城側との電話のやり取りは、K. の伯爵に招聘されてきた測量師であるという主張を疑わせる。なかでも城側の二度目の電話に対して示す K. の反応は、その疑問を一層強める。「K. は耳を傾けた。それでは城は彼を測量師に任命したのだ。それは一面では彼にとって都合の悪いことであった。なぜならばそれは、城の連中が彼について必要なことは一切合財知っていて、力関係を十分考えた上で笑って戦いを受けて立ったことになるからである。だが他面では好都合でもあった。というのは彼の考えによると、連中は彼を過小評価していることだし、彼は最初から思っていた以上に多くの自由をもてるだろうことが明らかだからである。また彼を測量師として認めたことは、たしかに精神的な優位を示してはいるが、だからといってたえず彼をおどろかせておくことができると考えようものならば、それは考えちがいのものだ。彼をいささかふるい上がらせはしたが、だがそれだけのことだ。」(S. 10) ここにあわれているのは、「強大な」敵としての城の存在についての意識以外のなにものでもない。測量師として認められることが一面で「都合がよく」て、他面では「都合の悪い」ような K. の意識に K. の主張の正当さを認めることは困難である。もっとも K. がここで測量師として「認められた」といってはいるが、それがわきめて怪しいものであることは章を読みすすむにつれて知らされる。「確認」の曖昧さについては K. 自身も我々と同様知らずにいる。この点についてはしかしここで取りあげる必要はないであろう。

K. が測量師であるか否かという問題は、「測量」ならびに「測量師」がもつ意味を新たに光の中にする。K. にとって本来職業はさして重要なことではない。むしろ旅へと駆りたてたものの方がはるかに重要なことである。しかし彼は、シュヴァルツァーとの一件以来この村においては測量師 K. として存在の形式を与えられる。シュヴァルツァーにゆり起こされることによって、目ざめの瞬間のもつあのすべてのものが不安定な状態にあって、しかも K. 自身無防備であるがために突然守勢に立たされて、口をついて出た「測量師」という言葉は、K. にとってその劣勢を埋め合わせるはずのものであったにせよ、一種の対外的な自己規定の表現であったということができよう。それがために後にこの夜のことを振り返って、「シュヴァルツァーのあのもてなしが多分それに続くすべてのことに方向を与えてしまったのだ」(S. 241)と思わずにはいられないのである。城側はそうした K. の意図を見抜いた上で、曖昧ながらも「確認」の電話を与えることによって城側の意味での存在を一人の「浮浪者」に与える。このことによって K. は、たいそ

う頼りないながらもこの城村での自己の依って立つ地盤を獲得することができたのである。この測量師という足場は、従って他のだれかから与えられたものではなく、K. 自らが選びとったものである。この足場の不安定さは闇の中にかかる木橋に似ている。この不安定さを克服すること、換言するならば「採用されていることについての立証責任」(S. 105)をはたすことが、この城村での K. の戦いのすべてになる。測量師採用の問題のみならず、自己の存在を立証すること、それがおそらくは K. が全存在をかけた任務の意味であろう。闇にかかる木橋の上には一切のものから解放された K. の姿がある。まさに「生れつき束縛されている精神の解放」<sup>9)</sup>である。

我々は「測量師 K.」に目を奪われるあまり、橋の上に立った旅人の姿を忘れてはならない。K. と測量師 K. との間には、「まどろみ」、「目ざめ」というカフカの言う「最も危険な瞬間」<sup>9)</sup>が挿入されていることに注意する必要がある。ひどく重苦しい到着の場面には、あくまでもその外見とは対照的に背負いきれないほどの重い荷をうちにかかえた一人の旅人がいるだけである。すでに冒頭においてカフカは K. の身からすべてのものをぎとってしまっている。K. に最少限度の持ち物だけを持たせて旅に出さずにいられなかったところにこの Roman に対するカフカの意図の一面をうかがうことができる。K. には持ち物は不要だったのである。K. の旅、それは自己の生活を検証し、反省を加えた後の、仕事も地位もない世界、慣れ親しんだものなのにひとつない世界への旅である。城村は精神を解放されたものによって「故郷の空気の成分とは異なっている」(S. 63)し、そこを訪れるものなどないために人をもてなす習慣がないように、外界との接触を断った地である。「彼以外にはまだだれも足を踏み入れたことのないような異郷」(S. 63)は、内省の後に自己の内面への旅へと駆りたてられた K. のためにと決められた地である。その地は、従って K. を客人として厚遇すべき理由もなければ、そうしたしきたりの存在すべき理由もたない。この道標もない異郷において手探りしながら進まなければならない K. に課せられたものは、「生きる」ために必要な自己享樂の断念である<sup>10)</sup>。「生きること」、それはカフカにとって人間に下された厳粛な判決であった。

## テ ク ス ト

Franz Kafka: Das Schloss, hrsg. von Max Brod, S. Fischer Verlag, 1967.

文中カッコ内の数字は本書のページ数を示す。

## 参 考 文 献

- Franz Kafka: Briefe 1902~1924, hrsg. von Max Brod, Schocken Books, 1958.
- Gustav Janouch: Gespräche mit Kafka, S. Fischer, 1968.
- Heinz Politzer: Das bittere Kraut—> Das Schloss<(in: Franz Kafka Der Künstler, S. Fischer, Studienausgabe, 1965.)
- Wilhelm Emrich: Franz Kafka, Athenäum, 1965.
- Hermann Pongs: Franz Kafka „Das Schloss“ (in: Das Bild in der Dichtung, Bd. III, Marburg, 1969.)
- Werner Kraft: Franz Kafka, Durchdringung und Geheimnis, Suhrkamp Verlag, 1968.
- Homer Swander: Zu Kafkas>Schloss<(in: Interpretationen 3, S. Fischer)

## 註

- 1) Politzer: Franz Kafka Der Künstler, S. 327.
- 2) Janouch: Gespräche mit Kafka, S. 82.
- 3) Politzerはこの点を「大きな城山」の「大きな」とならんで Erzählerの観察であるとして(S. 327)これをカフカの Erzählmethodeの逸脱の一例としているが、「大きな」はさておくにしても、この「外見上の」は必ずしも Politzerのあげる「どんなに弱い光もなかったから」という理由からだけでは首肯することができない。なぜならばこの「外見上の」は、K.の感想としてとらえることもできるからである。
- 4) Politzer: Franz Kafka, S. 397.  
Politzerはこの杖について、測量師のもつ Massstabのアレゴリーとみる。
- 5) Swander: Zu Kafkas >Schloss< S. 285.
- 6) Kafka: Briefe, an Brod 5. VII. 1922, S. 384.
- 7) Politzer: Franz Kafka, S. 394.
- 8) Kafka: Briefe, an Brod 5. VII. 1922, S. 384.
- 9) Kafka: Der Prozess, S. 305.
- 10) Kafka: Briefe, an Brod 5. VII. 1922, S. 385.  
Nötig zum Leben ist nur, auf Selbstgenuss zu verzichten.